

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 三宅 登之



学位申請者 李 宇霞

論文名 親疎関係によるポライトネスの日中対照研究—ディスコースポライトネス理論の観点から—

## 結論

李宇霞氏から提出された博士学位請求論文「親疎関係によるポライトネスの日中対照研究—ディスコースポライトネス理論の観点から—」について、三宅登之が主査をつとめ、副査として谷口龍子准教授（主任指導教員）、加藤晴子教授、井上史雄本学名誉教授、宇佐美まゆみ教授（国立国語研究所）の合計五名から成る審査委員会で、上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

## 論文の概要

本論文は、日本人と中国人それぞれの自然会話のデータ（日本人女性の初対面同士、日本人女性の友人同士、日本人男性の初対面同士、日本人男性の友人同士、中国人女性の初対面同士、中国人女性の友人同士、中国人男性の初対面同士、中国人男性の友人同士）、および、それらのフォローアップ・インタビューをもとに、会話相手との親疎の相違を分析することによって、ディスコースポライトネス理論（宇佐美 1998、2001、2002、以下 DP 理論）を実証的に検証しようとしたものである。ポライトネス理論における FTA（Face-threatening act(s) =フェイス侵害度）算定の公式、 $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ （ $D$ =距離、 $S$ =話し手、 $H$ =聞き手、 $P$ =力関係、 $R$ =負荷度）のうち、力関係と負荷度を固定した場合、距離（本論文では親疎関係：友人同士と初対面同士）の異なりが、日本人同士と中国人同

士の会話の進行や言語使用のストラテジーにどのような影響を与えるかという点に注目し、分析を行った。談話レベルで初対面同士と友人同士のそれぞれにおける言語行動の基本状態（＝無標ポライトネス）と有標ポライトネスを認定した上で、有標行動の「効果」について検証しようとしたものである。主な分析の項目は、文レベルの要素として、文中、文末のスピーチレベルと語彙の丁寧度、談話レベルの要素として、話題選択や話題の導入方法、および「あいづち」の形式と使用頻度を対象としている。

以下、本論文の構成と各章の概要をまとめる。

第一章では、本研究において DP 理論の枠組みを使用するに至った経緯や理由付けが説明される。従来の文レベルの分析では、ポライトネスの解明が難しく、談話レベルの理論である DP 理論を分析の枠組みとして採用することの必要性を論じている。第二章では、これまでのポライトネス研究の流れを概観し、Brown & Levinson のポライトネス理論を発展させた宇佐美まゆみの DP 理論が概説される。第三章では、本論文におけるポライトネスの定義が示され、その後で、会話データ収集の方法と手順、会話データ録音に際しての条件統制、および録音協力者の概要が示される。本研究に使われた会話データのうち、日本人女性初対面同士、友人同士、および中国人男性初対面同士、中国人男性友人同士、中国人女性初対面同士、中国人女性友人同士の会話データ（各組 6 ペアずつ）は筆者が収集、文字化し、日本人男性初対面会話（7 ペア）、日本人男性友人同士（6 ペア）のデータのみ『BTSJ による日本語会話コーパス(2013 年度版)』が使われている。第四章では、日本人の初対面同士と友人同士の会話について、文中、文末スピーチレベル、スピーチレベルシフトの点から分析結果が示される。スピーチレベルを 4 種類（“super-polite-forms”、“polite-forms”、“non-polite-forms”、“vulgar-forms”）に分けてコーディングした結果、日本人同士の会話において文中スピーチレベルは、男女、親疎ともに“polite-forms”が基本状態である一方、文末スピーチレベルは、初対面同士では、日本人の男女ともに“polite-forms”が基本状態、友人同士の場合は“non-polite-forms”が基本状態であると認定された。第五章

では、中国人会話の語彙の丁寧度についての分析結果が示される。中国人の男女の初対面と女性の友人同士の場合は、“polite-forms”が基本状態だが、男性の友人同士の場合は、“non-polite-forms”（ニックネームや俗語的な表現）が基本状態であるという結果であった。中国人男性友人同士の会話、および一部の女性の友人同士の会話には罵り言葉が有標行動として観察されたが、フォローアップ・インタビューでは言語形式としてはインポライトである罵り言葉が聞き手にとってはインポライトな印象を与えず、むしろ仲間意識を示す標示として好意的に受け取られていることは、従来 of 待遇表現に関する研究では説明できない点と言えよう。第六章は、話題選択と展開のプロセスについての日中対照の分析結果である。日本人と中国人ともに初対面同士の会話で最も多く選ばれる話題は大学生活に関する事柄であった。また、**自己紹介**→**大学生活**→**進路、出身**→**共通の話題**という展開パターンが共通の基本状態であるが、日本人の場合は、それらの冒頭に**あいさつ**が加わるという結果が示された。さらに、日本人女性初対面における話題選択のストラテジーの基本状態はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーだが、日本人男性初対面の場合は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであることが明らかにされた。第七章では、話題転換の有様と頻度についての日中対照の分析結果が述べられる。日本人、中国人ともに、初対面会話のほうが友人同士の会話より話題転換の頻度が高いという結果であった。言語形式を見ると、日中ともに、初対面同士の会話では、疑問文により新しい話題を提示し、友人同士では平叙文で提示していることが示された。また、友人同士の会話では、日本人男性同士と日本人女性同士、および中国人男性同士は、平叙文により話題を導入している一方、中国人女性同士では感嘆文で新しい話題を導入していることが明らかにされた。第八章は、「あいづち」の使用頻度や言語形式について日中対照の分析結果が示される。日本人と中国人のいずれも初対面同士の会話のほうが友人同士の会話より「あいづち」の使用頻度が高いことで共通していること、中国人より日本人のほうが「あいづち」の使用頻度が高い点が明らかとなった。第九章では初対面日本人と中国人それぞれの初対面会話と友

人同士会話におけるポライトネスの基本状態と日中の言語行動の共通点について本研究の研究設問への回答の形で総合的な考察が述べられる。日本人同士と中国人同士ともに、初対面の会話ではまず、相手のことを知るために、疑問文の形式で互いの情報を探り合い、話題転換も頻繁に行われる点で共通しており、その結果、「あいづち」が多用される点が基本状態であることが認定された。一方、友人同士の場合は、平叙文や（中国人女性の場合は）感嘆文で会話を進め、一つの話題について長く言及することから「あいづち」の頻度も低くなる点が明らかとなった。中国人男性は言語形式の語彙の丁寧度を下げることで親しみを表すのに対して、中国人女性の場合は、スピーチスタイルシフトではなく、個人的な話題を提供することで親しみを示す傾向がある点など興味深い。第十章では、本研究において、基本状態を同定することで、異なる言語における、場面や相手に応じたポライトネスの共通点を示したり、有標行動の効果を分析することで、同じ言語形式が、異なる効果を持つこと（罵りことばが、親近感を増す効果を持ったり、多少の不快感を生んだりするなど）を実証的に明らかにすることができ、DP理論の有効性が示されたという結論で締め括られる。

#### 審査の概要、及び評価

審査委員会が最も高く評価した点は、文中、文末の丁寧度、談話転換と「あいづち」のトピックについて、条件統制のなされた自然会話のデータをもとに、日本人と中国人、女性と男性、親疎の相違という三つの対照軸における各々の異同や各対照軸間の関わりを明らかにした点である。談話レベルで定量的分析、および定性的分析を行い、それぞれの無標ポライトネス（基本状態）と有標ポライトネスを明らかにし、DP理論の枠組みで研究成果を結実させた論文と言える。さらに、膨大な録音データを文字化し、コーディングを行っている点や、これまでポライトネス研究が局所的にしか行われていなかった中国語について親疎によってポライトネスの差があることを明確に示した点、ポライトネス・ストラテジーだけでなく、ポライトネスの効果も分析した点も高く評価された。本研究の調査か

ら導き出された日中の結果は、いずれも審査委員が納得のいくものであり、本研究における分析の枠組みや分析の手順は、今後、敬語体系の異なる言語を比較対照し、ポライトネスの普遍性と個別性を探るための試論として示唆され、その意義は大きいと判断された。

一方、各審査委員からは、以下のような問題点も提示された。①中国語の文や文法用語の定義がいささか不明瞭で、先行研究で使われている複数の用語が混在しているようなところがみられる。②グラフなどの結果の提示の仕方がわかりにくいところがある。③論述の流れとしては、本研究の成果として日中の異同を先に示してから、その結果に至るまでのプロセスを中心に述べつつ周辺的な結果を述べるような論じ方にすれば本研究の価値がよりわかりやすく示せたのではないかと。

ただし、これらは、本研究の意義を損なうものではなく、むしろ今後の研究のさらなる発展のための助言であると捉えられる。また、口述試問でのこれらの指摘に対する応答から、李氏が夥しい先行研究に当たり、本論文の諸処の結論に至るまでに十分な熟考を重ねてきた様子が窺えた。

本論文は、テーマ設定、ポライトネスの理論の枠組みにおける自然会話のデータ分析の重要性、日本語と中国語の談話レベルでの対照研究における研究成果の学術的意義、論述構成の明確さのいずれについても博士論文としての要件を十分に満たしていると認められた。したがって、審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。